

早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文概要書

JFL 高校生の異文化体験と日本語教育についての
一考察

諏訪 直子

2009年9月

第1章 問題の所在

1983年に策定された「留学生受け入れ10万人計画」¹が2003年に達成され、それ以降も、渡日する外国人留学生の数はアジア地域からの学生を中心に、約12万人前後で推移している。また、近年は、大学生のみならず、高校生を対象とした長期休暇を利用した目標言語使用環境への留学や修学旅行が、盛んに行われており、高校生という10代の若いうちから、日本国内から国外へ、諸外国から日本へと、数多くの高校生が海外留学を経験している。留学にはプログラムの内容や滞在期間、受入れ先など様々なものがあるが、その主たる目的は、語学研修プログラムに参加することで、自身の語学力の向上に努めることに加え、ホームステイをしながらホストファミリーと日常生活を共有することや、現地の人と毎日の生活を積み重ねることで、お互いの文化や価値観への理解が深まり、それと同時に日本や自分自身についても新たな発見をすることだといえる。

2008年には、「留学生30万人計画」²の骨子が発表され、「グローバル戦略」展開の一環として、2020年を目途に留学生受け入れ30万人を目指すことが明らかにされた。その概要には、高校生の留学生、研修生の具体的な人数や計画は述べられていないが、この計画に沿って、世界中から来日する留学生が増加すれば、海外留学の低年齢化とともに、今後、高校生の留学生の受け入れや派遣の数も増加することが考えられる。

筆者は2007年2月から12月まで、オーストラリア・ヴィクトリア州にあるM高校³の日本語教育アシスタント（以下、アシスタントとする）として、中学3年生から高校3年生の授業アシスタント及び、高校3年生のVCE試験（Victorian Certification of Education、以下、VCEとする）⁴の指導を行った。そこで関わった日本語履修者は、日本文化そのものに興味や関心を持ち、「内発的動機」から日本語を学習している生徒や、将来、日本でのビジネスを考えているという「外発的動機」から日本語を学習している生徒など、多種多様の動機を持っていた。動機の強さも、学生によって大きく異なっていたと感じた。

M高校の日本語のクラスでは、日本への派遣プログラムが2つ用意されており、隔年ご

¹ 21世紀初頭における10万人の留学生受入を目指すことを内容とする、1983年の中曽根内閣による政策。2003年に達成された。

² 平成20年に発表された、日本を世界により開かれた国とし、アジア、世界の間へのヒト・モノ・カネ、情報の流れを拡大する「グローバル戦略」を展開する一環として、2020年を目途に30万人の留学生受け入れを目指す計画。

³ オーストラリア・ヴィクトリア州の高校は、日本の中学3年生から高校3年生に相当する4学年が在籍するSenior Schoolである。

⁴ オーストラリア・ヴィクトリア州における高校卒業試験兼大学入学共通専攻試験。オーストラリアには、日本のような大学入試試験制度はなく、在学中の成績と最終学年である高校3年生の終わり頃に行なわれる各州の統一試験によって高等教育の進学資格を取得するシステム。

とに参加者を日本の受入れ高校へ派遣している。1つは、高校1年生を約4週間、短期交換留学生として派遣するプログラムで、もう1つは、異文化体験プログラムとして、中学3年生から高校2年生を約2週間派遣しているプログラムである。4週間のプログラムは、高校1年生の日本語履修者の中から希望者を募り、選抜を行った上で、参加者を決定している。一方、本研究で取り上げる、2週間の異文化体験プログラム（以下、プログラムとする）では、中学3年生から高校2年生の全ての日本語履修者の中から希望者を募り、通常、希望者全員が参加できるプログラムである。プログラムの内容は、約1週間かけて日本国内を旅行し、残りの約1週間は、姉妹校である東京都内のW高校のホストファミリーの自宅でホームステイをしながら、W高校で日本語の授業やアクティビティに参加するプログラムである。

高岸（2000）で「調査結果により、留学経験と外国語学習動機は密接な関係があるということが明らかになった」ように、留学経験は、学習動機に様々な変化をもたらし、外国語学習のために重要な役割を果たしている。では、M高校のプログラムのように、短期間の異文化体験プログラムは、高校生の日本語学習にどのような影響をあたえているのだろうか。そして、滞在中の日本語の授業が短時間であっても、高岸（2000）が「留学経験と外国語学習動機は密接な関係があるということが明らかになった」と述べるように、参加者はこのプログラムに参加したことにより、外国語学習動機に変化があったと考えられるのではないか。日本語学習動機の変化があるとすれば、それはどのような変化であり、その要因は何であるか。異文化体験プログラムを利用して来日した、オーストラリアのJFL（Japanese as a foreign language、以下、JFLとする）⁵高校生の参加者への日本滞在中と帰国後のインタビュー、そしてオーストラリアへ帰国後の日本語の授業参与観察とインタビュー、アンケートを通して、JFL高校生の日本語学習動機の変化と、JFL高校生にとっての異文化体験プログラムの役割を再考するとともに、このプログラムの課題を挙げ、提言を行う。

第2章 日本における異文化体験とは何か

本研究では対象者をオーストラリアのJFL高校生とし、日本での滞在期間が約2週間の

⁵ Japanese as a Foreign Language：第二言語としての日本語。JFL高校生は、日本語を第二言語として学ぶ高校生。

「異文化体験」に焦点を当て、学習者の日本語学習動機の変化を調査する。このプログラムの特徴は日本語学習の時間が4日間、それも1日に2コマ⁶と大変少ないことである。そのため、観光が主となったプログラムのように見受けられる。日本語の授業は、1名の日本語教師によって進められ、ホスト生の他にW高校のボランティアの生徒も授業に参加していた。6名のM高校の参加者に対し、ホスト生とボランティアの生徒は毎回、合計約20名という大人数だった。M高校の参加者は、日本語授業の初日には、ホスト生以外のボランティアの生徒の多さに圧倒された様子を見せ、大勢の人の前で話すことが照れくさそうにしていたが、活動型の授業を通してすぐに慣れ、さよならパーティーの際には、日本語授業の初日に比べ、かなり親しくなった様子が伺えた。

M高校の教諭B、教諭Cの話から、旅行を通して日本文化を知ることと、日本語の授業における学習の両方を重要視していることがわかった。また、どちらも独立したものではなく、両者は関連性が高く、一方を学ぶことにより、もう一方も同時に学ぶことができるという考え方を持っている。つまり、日本語の授業日数が短いことは問題視されておらず、日本語の授業だけが日本語を学べる場ではなく、国内旅行を通して日本語に触れることも、日本語学習の一部として考えているようだ。

さらに、「伝統的なものだけでなく、今の日本文化を知ること」、「会話を重視し、日本語母語話者のスピードに付いていける力を付けること」、「日本語母語話者の教師から学び、日本語母語話者と話すこと」をプログラムの目的としているように、オーストラリアの教室内では学ぶことのできないことを学ぶことも、このプログラムに期待していることの1つである。

第3章 受入れ側の対応と交換留学プログラム

W高校では、2002年より毎年夏休みにM高校へ参加者を派遣しているが、M高校のプログラムとの違いを5つ挙げる。

①参加者の選抜の有無

W高校は例年、募集人数を超える応募者があり、作文を提出することと、面接での志望理由、応募者の受け答え、礼儀、日本文化の説明方法等から、複数の教師が選抜を行って

⁶ 全4回。50分×2コマ(=100分)の授業

いる。一方、M 高校は日本語の履修者が、例年それほど多くないということもあり、異文化体験プログラムには、これまで選抜は行っておらず、参加を希望した生徒全員が来日している。これは、両校の状況が異なるため、選抜を行うことが望ましいかどうかを判断することは難しい。

②事前研修、オリエンテーションの有無

先行文献や、過去のプログラム参加者の話から、出発前に語学学習を行うことや滞在先について知ることの重要性は明らかになっているため、筆者は W 高校のように、事前教育指導を行うべきだと筆者は考えている。

また、W 高校では、参加者が決定した後、参加者のみを対象としたオリエンテーションを 2 回、保護者同伴のオリエンテーションを 1 回行い、出発前の準備や注意事項の確認を行っている。派遣する側として、参加者のみならず、保護者とも情報を共有できる点で、意義のある取り組みだと思われる。

③目標言語の学習時間、旅行の長さ

目標言語の学習時間は、M 高校のプログラムでは国内旅行と学習時間の比率があまり変わらないのに対し、W 高校のプログラムは、ホームステイをしながらの英語学習がメインとなっている。各学校によってプログラムに対する考え方があるだろうが、M 高校の参加者からは、旅行が長くホームステイの期間が短いという声が多く出ている。M 高校は、国内旅行を異文化体験の重要な要素の 1 つだと考えているが、プログラム中の旅行の長さについては、上記のような意見が出されている以上、見直すべき点だと言えるだろう。

④目標言語学習時のボランティアの有無

W 高校のプログラムでは、参加者のみで英語の授業を受ける一方で、M 高校のプログラムでは、日本語学習には W 高校のホスト生と、ボランティアの生徒が加わり、一緒に日本語の勉強をしたり、授業のサポートをしたりする。M 高校のプログラムの日本語学習は、日本語母語話者である W 高校の生徒と「交流」することが、目的の 1 つである。4 日間という短い期間を、日頃オーストラリアの教室で一緒に勉強している仲間だけで勉強するより、刺激があり、日本語学習に効果があるのかもしれない。W 高校のプログラムは、英語は W 高校の参加者のみで学ぶが、ホスト生と一緒に通常の M 高校の授業にも出席できるの

で、2つの異なる経験ができる。両校の参加者の感想を聞いても、双方の授業とも特徴的で、通常は経験できない授業なので良かったという意見が聞かれた。

ホスト生やボランティアの生徒が授業に加わることを、プログラムの特徴とするのであれば、ホスト生やボランティアの生徒は、日本語の授業の趣旨や異文化交流の意味を事前に理解しておくことや、運営側もM高校の参加者との人数の調整等を行う必要があるだろう。

⑤参加後の活動の有無

M高校は、参加後の活動は何も行っていない。W高校では、帰国後にプログラム内容についてのアンケート調査を行い、翌年以降のプログラムの参考にしている。さらに、秋に行われる文化祭で、発表をする場が設けられている。帰国してプログラムが終了するのではなく、その後も同じ体験をしてきた仲間たちと、成果や経験をレポートとして発表することは、英語学習動機に影響を与えるかもしれない。また、この活動は受験生や後輩たちに向けてのPRにもなる可能性も大きい。

プログラムは、参加するだけで終わりではなく、出発前から帰国後までがプログラムである。従って、プログラム参加後には、滞在中の思い出や気持ちが新鮮なうちに、継続的な学習に結び付けられる活動を行うべきだと考える。

事前教育指導には、参加者の言語の能力の向上や、現地の情報や知識を得るだけでなく、参加者同士の交流という点でも効果がある。W高校の参加者は、在籍する学年やクラスが異なるため、参加者全員と一緒に通常の授業中に英語を学ぶことはないため、参加者として選ばれて初めて顔を合わせ、事前教育指導や説明会を通して親しくなる。つまり、出発前から交流が行われているという。こういった点でも、事前学習は大きな意味を持ち、プログラムは、出発前から始まっているといっても過言ではない。条件や制約の異なる両校のプログラムを単に比較することはできないが、どちらも言語学習を行うという点では、共通している。しかし、M高校のプログラムは、ホームステイの期間が短すぎるのが、現状だといえる。異文化体験に、日本語母語話者との「交流」も含まれているのであれば、M高校の参加者と引率教師だけで行う国内旅行に重点を置くのではなく、ホームステイと日本語学習を重視した方が、異文化を体験できる機会が多いに違いない。

また、プログラムを実施する者にとって、参加者や保護者への説明責任は当然あり、よ

り良いプログラムにするためには、両校の連絡を密にすることも大切なことの1つである。運営側のプログラムに対する意識が高くなければ、より良いプログラムは生まれにくいことに繋がるだろう。

第4章 異文化体験がJFL高校生に与える影響とは—インタビュー調査から—

本研究では、まず調査1として、来日前の参加者に対し、日本語学習の動機、プログラムに期待すること等についてEメールを使用して調査を行った。

そして調査2として、プログラム終了時に、参加者に対し、プログラム内容について、動機の強さに変化があったか、今後の日本語学習について、インタビュー形式で調査をした。また、参加者を受け入れたホスト生と、ホストファミリーへのインタビューも行った。

それらの結果から、2週間の異文化体験プログラム終了時には、参加者4名の日本語学習動機に変化が見られたことが明らかになった。このプログラムは、国内旅行を前半に行い、ホームステイが後半という内容であるが、ホームステイの最終日に差し掛かった帰国前日に終了時インタビューを行ったことから、プログラムの中でホームステイの印象が最も強いと思われた。しかし、参加者にとっては、国内旅行で体験したこと、日本語の授業で学んだこと、ホームステイでホストファミリーと過ごしたことの全てが、日本語学習動機に影響があり、どれか1つの部分だけから強い影響を受けているわけではないという回答であった。

また、参加者のホストファミリーの自宅での過ごし方については、ホストファミリーの話から、ホームステイの最終日に近づくトリビングで過ごす時間が長くなったという声が多く聞かれた。参加者の性格などにもより、個人差はあるだろうが、家族の一員としてホストファミリーと接する時間が増えることで、耳に入る日本語量が増え、発話量も増加するということが、1週間ほどのホームステイでも明らかとなった。生活が安定し、安心感が増すことが、語学の向上にも繋がると考えられそうだ。

さらに、ホスト生やホストファミリーからは、参加者を受け入れたことで、日本語や日本について考えるきっかけになったとの声もあった。このようなことも、このプログラムの良い点の1つだと思われる。

第5章 日本語学習動機の変化―帰国後の授業参与観察とインタビュー調査から―

異文化体験プログラムは、帰国後の参加者の日本語学習動機に変化を与えているのか。参加者の学習動機の変化を聞き取り調査することにより、プログラムの改善を図るべく、帰国後に調査を行った。

参加者のインタビューから、帰国2ヶ月後には4名中3名の参加者が、強さには個人差があるものの自分自身の日本語学習動機に変化を感じていることがわかった。プログラムに参加したことは、日本語学習に対する考え方や学習時間の増加にも影響を与えているようであり、多くの参加者が日本語の能力の向上を感じていた。プログラムに参加したことで、日本語学習動機が強まり、日本語能力の向上にも繋がっていることから、2週間という短期間であっても、異文化体験プログラム参加経験と日本語学習動機には密接な関係があるという結果が明らかになった。

第6章 本研究のまとめと提言

現在のプログラム内容のまま、これから先もプログラムを実施していくべきだろうか。M高校側は、このような参加者の声に応えるべきである。そして、その都度行われたプログラム内容を検討し、改善していく必要があるといえるだろう。今回行われたM高校の異文化体験プログラムの課題を挙げ、より良いプログラムを作り上げるべく提言を行う。

①出発前の準備体制の充実（事前教育指導と保護者への説明）

参加者本人に限らず、参加者を送り出す保護者にとっても、日本や日本の受け入れ先の情報を得て、少しでも不安をなくして参加したい（させたい）と思うものである。また、参加者は、滞在先など現地の情報を得ることにより、スムーズに日本での生活に慣れることができるだろう。スムーズにホームステイを開始できれば、より早い段階でホストファミリーとも関係性を築けるのではないかと考える。

出発前に、日本国内での旅行中やホストファミリーの自宅での生活に必要な日本語を習得し、日本事情や日本滞在中のマナー等の心構えを、W高校で行われているような事前教育指導という形で、参加者が、教諭もしくはアシスタントから学ぶことを提案したい。教諭やアシスタントの一方的な情報提供や、滞在中に役立つ日本語の学習だけでなく、滞在

中にどんなことを学び、どのように過ごすかを参加者に考えさせることも重要だろう。

さらに、受け入れ先のホストファミリーの情報や、プログラムの詳細を、参加者の保護者へ事前説明を行うことも、参加者への事前教育指導と同様に大切なことである。また、音声通話ソフト「Skype」を使用して、ホスト生や W 高校の授業の様子を知り、出発前から交流を深めることにより、ホームステイ先に到着し、受け入れ先にいち早く溶け込み、スムーズに短期間のホームステイを開始できることが期待される。

このように、出発前の準備段階からプログラムを充実させることは、参加者と受け入れ側の連携を円滑にし、また参加者や保護者、教師の不安を緩和させ、有意義な日本滞在の助けとなるだろう。

②受け入れ態勢の充実

プログラム終了後に行ったインタビューや W 高校が行ったアンケート結果からも、W 高校のホスト生のみならず、ボランティアも日本語やアクティビティに参加し M 高校の生徒と交流したことを、良い経験だったと話し、自らの英語学習意欲や、異文化交流に対する関心が高まったと答えた生徒もいたことがわかった。また、M 高校の参加者も、国内旅行と同様に、W 高校での日本語授業やアクティビティ、ホストファミリーの自宅での生活を高く評価している。それは、W 高校の関係者の受け入れ態勢の整備、ホストファミリーの確保や、ホスト生とのマッチング、参加者に対するサポート体制が、充実しているからこそその回答だと思われる。

現在の両校の友好的な関係を持続するため、ホストとのマッチングの際の情報資源となるため、短期交換留学プログラム以外にも、両校の相互交流をさらに推進していく必要があると考えられる。例えば、両国には時差が少ないことから、①で挙げたような音声通話ソフト「Skype」を授業に取り入れ、日常的にコミュニケーションを行い、相互の近況を報告しあったり、情報交換を行ったり、トピックを決めて話し合うこともできるだろう。これにより、交流が深まり友好関係が保たれるだけでなく、相互のさらなる語学力の向上にも繋がる可能性がある。

出発前から帰国後までの、きめ細やかな一貫した支援を実施できるよう、送り出す教師と保護者、受け入れる側のホストスクールやホストファミリーの組織体制を整備することもより良いプログラムに必要不可欠なことである。

③帰国後の学習意欲維持のための体制作り

プログラム終了後のインタビュー調査で、6名中4名の参加者から、プログラムは学習動機に影響があったという結果が得られたが、そのモチベーションを長期的に維持することは可能だろうか。帰国から新学期が始まるまで1ヶ月以上期間が空き、参加者の多くは、その期間は日本語の学習時間が学期中に比べて減ってしまったり、日本語学習自体から遠ざかってしまったという声もあった。ただ単にプログラムに参加して、良い思い出にするのではなく、帰国後も高いモチベーションを持ち続けることにより、日本語能力を高めていく必要がある。

また、短期交換留学は、参加者だけでなく、参加しなかった他の生徒や教師にとっても得られる効用が高いことがわかった。そのため、参加者が帰国後に、参加者と参加しなかった生徒の交流の場を設け、日本での経験を発表する機会や、日本滞在の「振り返り」を行うことにより、参加者自身の成長はもちろん、参加しなかった他の学生にも刺激を与えるという相乗効果が期待できる。日本での経験をそのままにさせるのではなく、今後の参加者の日本語学習にどう生かしていくかを、まずは教師が率先して考えなくてはならないだろう。

本研究では、約2週間の異文化体験プログラムは、参加者によってその程度は異なるものの、日本語学習動機や日本語学習に対する姿勢に影響を与えること明らかになった。それと同時に、滞在期間が短く、日本語学習期間が限られたわずかな時間しかないからこそ、事前教育指導と帰国後も高いモチベーションを持ち続けられるような活動が重要であることが、より明確になった。以上のことから、プログラムの期間を変えることはせず、これから先も同じような内容のプログラムを続けていくことは、M高校の教諭が期待するような、参加者の日本語学習に高い効果が期待できるプログラムであるとは考えにくいだろう。参加者の日本語学習に効果があるようなプログラムにするためには、「事前教育指導」と、「帰国後の活動」に対する、M高校の教諭の意識を変えることが、最も重要なことであろう。プログラムの運営に関与している教諭の意識が高くなければ、参加者の意識も変わらないと筆者は考えている。両校のプログラム運営の担当者同士の連携を強化させる意味も含め、今後のプログラムの在り方や方向性について意見交換を必要とするプログラムを見直すべき時期にきているのではないか。プログラムの主役は運営側ではなく、あくまでも参加者であることを常に念頭に置いたプログラムとなることを期待したい。

【参考文献】

- 植田栄子（1995）「海外日本人家庭で行うホームステイプログラムの有効性：タイにおける日本語学習者の場合」『世界の日本語教育〈日本語教育事情報告編〉』2号、独立行政法人国際交流基金、pp.213-232
- 川上郁雄（2004）「新時代の日本語教育をめざして 第6回 子どもたちがことばを習得するとき」『日本語学』9月号、明治書院、pp.78-89
- （2006）『「移動する子どもたち」と日本語教育—日本語を母語としない子どもへのことばの教育を考える—』明石書店
- クラーク、ヒュー（1994）「オーストラリアにおける日本語教育—その政策、実践、展望」『世界の日本語教育〈日本語教育事情報告編〉』1号、独立行政法人国際交流基金、pp.71-84
- 北浜栄子・天寄聡介（2006）「交換留学生のための教育カリキュラムの設計に関する研究—学生による授業評価の統計的分析に基づいて—」『多文化社会と留学生交流』10号、大阪大学留学生センター、pp.1-20
- 倉八順子（1991）「外国語学習における情意要因についての考察」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』33号、慶應義塾大学大学院社会学研究科、pp.17-25
- 倉八順子（1992）「日本語学習者の動機に関する調査—動機と文化的背景の関連—」『日本語教育』77号、日本語教育学会、pp.129-141
- 近藤佐知彦（2005）「実践報告 新たな短期留学プログラム構築への提言」『多文化社会と留学生交流』9号、大阪大学留学生センター、pp.35-50
- 鹿浦佳子（2007）「ホームステイにおける日本語学習の効用—ホームステイ、留学生、日本語教員の視点から—」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』17号、関西外国語大学、pp.61-112
- 鹿浦佳子・武田千恵子（2000）「ホームステイの功罪とホームステイプログラムへの提言」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』10号、関西外国語大学、pp.33-50
- 佐々木ひとみ・水野治久（1999）『ホームステイハンドブック ホストファミリーと運営担当者のために』（JAFSEブックレット（1））アルク
- 清水 禎子（2004）『ホームステイがやってきた』木魂社
- 鈴木京子（2003）「オーストラリアにおける日本語教師の『文化の学習』観に関する一考察」『21世紀の『日本事情』』編集委員会編『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化

- リテラシーへ』5号、くろしお出版、pp.140-148
- (2004)「LOTE教育のカリキュラム—クイーンズランド州の日本語教育の事例を中心に（特集論文オーストラリアの学校教育カリキュラム）」『オセアニア教育研究』10号、オセアニア教育研究学会、pp.19-30
- 高岸雅子（2000）「留学経験が日本語学習動機に及ぼす影響—米国短期留学生の場合」『日本語教育』105号、日本語教育学会、pp.101-110
- 富阪容子（2006）「ホームステイ先における言語習得—甲南大学夏期日本語集中講座の場合—」『言語と文化』10号、甲南大学、pp.219-231
- トムソン木下千尋（2002）「海外の日本語教育における日本文化の学習を促すコースと教師の役割」 「21世紀の『日本事情』」編集委員会編『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』4号、くろしお出版、pp.4-17
- 成田高宏（1998）、「日本語学習動機と成績との関係—タイの大学生の場合—」『世界の日本語教育・日本語教育論集』8号、独立行政法人国際交流基金、pp.1-11、p.273、p.280
- ネウストプニー、J. V（1987）『外国人とのコミュニケーション』岩波書店
- 縫部義憲 狩野不二夫 伊藤克浩（1995）「大学生の日本語学習動機に関する国際調査—ニュージーランドの場合—」『日本語教育』86号、日本語教育学会、pp.162-172
- 芳賀浩（1995）「オーストラリアの中等教育レベルにおける日本語教育のカリキュラム・ガイドライン」『世界の日本語教育〈日本語教育事情報告編〉』3号、独立行政法人国際交流基金、pp.101-117
- 橋本博子（1998）『オーストラリアの大学生と見たニッポン』平原社
- (2000)「グローバル化とオーストラリアの留学生政策」『留学生教育』5号、留学生教育学会、pp.27-48
- (2004)「オーストラリアの大学からの短期留学プログラム参加者の勉学面での満足度」『留学生教育』9号、留学生教育学会、pp.181-191
- (2006)「多文化社会」オーストラリアの大学生にとっての日本留学の意義」『オセアニア教育研究』12号、オセアニア教育学会、pp.88-95
- 八田直美（1995）「外国人日本語教師のための日本語クラスについての試み」『日本語国際センター紀要』5号、独立行政法人国際交流基金、pp.55-68
- 八田直美・山口薫（1993）「日本語教育における日本人アシスタント導入の意義と可能性—91年冬期の実践をもとに—」『日本語国際センター紀要』3号、独立行政法人国際

- 交流基金、pp.103-104、p.107
- 原田登美（2008）「学習経験は学習動機にいかに関わっているかー「自己決定理論」に拠る「甲南大学 Year in Japan プログラム留学生」の留学と日本語学習の動機の変化ー」『言語と文化』22号、甲南大学国際言語文化センター、pp.151-171
- 藤井桂子（2007）「留学生センターホームステイプログラムの現状とその意義」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』14号、横浜国立大学、pp.61-78
- 船山久美 宮崎七湖（2003）「アシスタントを導入した短期留学生のための日本語プログラム：第1回早稲田高校/メルボルン・グラマー・スクール交換留学プログラムより」『早稲田大学日本語教育研究』3号、早稲田大学、pp.85-97
- 古屋則子（2005）「短期留学は効果的であるか」『文化女子大学紀要 人文・社会科学研究』13号、文化女子大学、pp.19-30
- 松田康子（2007）「短期海外研修の意義とその事前研修についてー学生の報告書とアンケート調査の結果からー」『名古屋文理大学紀要』7号、名古屋文理大学、pp.45-50
- 三浦省五（1983）「学習意欲と動機づけ」三浦省五編『英語の学習意欲』所収 大修館
- 三牧陽子・北浜榮子・浜田麻里他（2002）「調査報告 留学生の言語生活と日本語学習ー留学生および受入れ側に対するインタビュー調査からー」『多文化社会と留学生交流』6号、大阪大学留学生センター、pp.79-91
- Garner, R. C. and Lambert, W. E. (1959) *Motivational variables in second language acquisition*. Canadian Journal of Psychology 13, pp.266-272
- Garner, R. C. and Lambert, W. E. (1972) *Attitudes and Motivation in second language learning*. Newbury House
- Oxford, L. Rebecca& Jill Shearin (1994) *Language Learning Motivation: Expanding the Foreign Theoretical Framework*. The Modern Language Journal 78, pp.12-28
- Pitt Marie (1999)「ビクトリア州における LOTE プログラムー日本語教育の現状と教員育成・現職研修ー」『世界の日本語教育〈日本語教育事情報告編〉』5号、独立行政法人国際交流基金、pp.39-52
- Victorian Curriculum and Assessment Authority (2000) *Curriculum and Standards Framework II* : Victorian Curriculum and Assessment Authority (翻訳 宮崎里司 訳 (2004)『カリキュラムと学習基準の枠組み II LOTE (英語以外の言語) 日本語別冊』独立行政法人国際交流基金日本語国際センター)

Victorian Curriculum and Assessment Authority (2004) *Japanese Second Language Victoria Certificate of Education Study Design* : Victorian Curriculum and Assessment Authority (翻訳 宮崎七湖 訳 (2004) 『第 2 言語としての日本語 VEC 学習設計』 独立行政法人国際交流基金)

【参考資料】

『語学研修ハンドブック 2009』 社団法人 日本旅行業協会／留学・語学研修等協議会 (CIEL) 編集・発行

国際交流基金「日本語教育国別情報」国別一覧オーストラリア
<<http://www.jpj.go.jp/j/japanese/survey/country/2007-2008/australia.html>>

[2009.5.14]

全国高校生留学・交流団体連絡協議会 (高留連) 研究協議会基調講演「国際社会の変動と異文化体験としての高校生留学」中嶋嶺雄

<http://www.koryuren.gr.jp/koryuren_towa_top.html> [2009.5.14]

平成 20 年版青少年白書 第 5 節 海外交流等に関する状況

<http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h20honpenhtml/html/b1_sho2_5.html>

[2009.4.21]

文部科学省 平成 18 年度 高等学校等国際交流等状況調査

<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/11/07103102/001.pdf> [2009.1.3]

文部科学省 高等教育局学生支援課 平成 20 年度 我が国の留学生制度の概要

<http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/081210.pdf> [2009.4.30]

IT 用語辞典 e-Words

<<http://e-words.jp/w/Skype.html>> [2009.6.3]

Welcome to JR JAPAN RAIL PASS

<<http://www.japanrailpass.net/ja/ja001.html>> [2009.6.3]

【参考教材】

Aitchison, K. (2000) *KOKO SEIKATSU Revised 1-2*. MacMillan

Williams, P., Xouris, S., Kusumoto, K. (1996~2000) . *Obentoo1-3*. Thomas Nelson